

雑誌「医学教育」

——過去12年間の実績と今後——*1

鈴木 淳 一*2

1. はじめに：専門誌としての必要性、役割の保持

雑誌「医学教育」も刊を重ねて、昨年、12巻を完結した。学会の機関誌として、学会誕生に遅れることわずか半年、翌年の2月に創刊されたのであるから、文字どおり、12年間学会の歩みを記録しつつ今日にいたった。

本誌は、創刊以来、例外的増頁を除いて、毎号65頁、隔月刊行を守ってきた。会誌の刊行は、会員1,000名以下の学会にとっては、かなりの重荷であったため、はじめ、医歯薬出版、次いで Josiah Macy Jr. Foundation、などから援助を得てきた。11巻以後は、篠原出版の好意的契約によって、会誌出版の学会負担がかなり軽減されていることを付言する。

医学教育にまつわる問題は多い。主張、調査、研究、教育的資料、討論などを掲載し、記録として永久に止めることの重要性は言をまたない。

教育施設で教鞭をとるものの数は、わが国においては過去10年来の医学校新設ブームによって倍増したといつてよい。教師は、すべて、当然ながら、意見なり主張もっている。意見や主張は、もちろん、もっとも重要であるが、それらを支える資料や理論に欠けると、多くの支持を得ることは困難である。

「医学教育」が目ざすところは、まさに、その辺にある。資料の収集、整理、それらに基づく研究、科学的、統計的分析などが示される必要がある。すべての主張には、いかに、はじめ妥当であると考えられても、それなりに反対の意見を伴うし、主張を最終的に押し通すことは、一般に容易ではない。また、たんなる思いつきで、医学教育を曲げないためにも、客観的裏付けや、学問的支持が必要な所以である。

*1 The Journal: MEDICAL EDUCATION, in the Last 12 years and its Future.

*2 SUZUKI, Jun-Ichi 帝京大学医学部耳鼻咽喉科学教室、医学教育学会編集委員会委員長

2. 「医学教育」の12年間

巻頭言は、医学教育に関する、シニアの意見開陳である。12年間のテーマを、下に列挙した。巻頭言は、はじめ各号にのせられたが、のちに1号だけになり、数は少なくなった。

「医学教育」の創刊にあたって	牛場大蔵
医学教育の重要性	沖中重雄
医学教育のおくれと反省	篠田 糺
医学教育と百貨店と演劇	緒方富雄
医者人間形成	小川鼎三
人と人のふれ合いによる教育	高津忠夫
解剖学に因んで	平沢 興
基礎医学と臨床医学	小林芳人
卒業後教育について	榊原 仟
実習重視の再検討	牛場大蔵
医学教育の近代化に思う	大島正光
「医学教育」刊行第3年目を迎えて	牛場大蔵
自らを省みて現在に望むこと	三浦運一
医師の生涯教育について	武見太郎
英国医学教育雑感	水野祥太郎
全体の中での個々の位置	後藤敏郎
実証的医学教育論	緒方富雄
これからの医学教育	永沢 滋
新しい医学教育の方向はどこか	黒川利雄
これからの日本の医師卒後教育	塚本憲甫
医のあり方と医学教育	西丸和義
臨床医をつくる教育	福田 保
医学と医療	中山恒明
医学教育における医術と医学と医道	間田直幹
専門医と一般医	赤倉一郎
医師国家試験	木村 登
これからの卒前基礎医学教育	大高裕一
医学教育における問題点	岡島道夫

国立の大学医学部医科大学の入学試験について	松永藤雄
私立医大入試の問題点	桑原章吾
Teacher Training	牛場大蔵
長期計画の必要性	吉利 和
医学教育に関する全国的組織の提唱 ——日本医学教育学会創立第8年を 迎えて	牛場大蔵
医学に思う	遠城寺宗徳
医学部・医科大学における入学者選 抜方法——とくに共通一次試験と 関連して——日本医学教育学会選抜検討委員会	
日本医学教育学会第10周年を迎えて	牛場大蔵
北欧をめぐる	懸田克躬
“医師過剰”への対処	牛場大蔵

本誌は、年1回の大会号と、少数の例外を除いて、今日まで、各号に特集を組む編集方針を貫いてきた。特集は、いわば、編集委員会すなわち学会指導による世論喚起である。以下に、年代順に、特集（ワークショップ含む）のテーマを列挙した。

第1回日本医学教育学会シンポジウム
医学教育の目的
大学病院
欧米における卒後臨床教育
医学進学課程
基礎医学教育
医学教育における最近の技術
医学教育の面からみたオープン病院
学部教育の目標と評価
日本医学教育の現況
社会医学教育
医師の生涯教育
“パラメディカル”教育の現状と将来
医学教育者の養成
第54回医師国家試験
医学教育と一般病院
卒後臨床教育の現状の問題点
歯学教育の現状
学部学生教育における救急医療 教育病院
第56回医師国家試験に関する感想
よい医療の指標
卒後臨床教育の現状と問題点

医学教育と研究
家庭医
卒前医学教育の再編成
医師国家試験改善の方向
入試の現状と問題点
第1回医学教育ワークショップ
基礎医学実習のあり方
診断学実習・臨床実習のあり方
教育媒体
Health Manpower 教育の現況・将来の展望と問題 点
医師国家試験の改善——昭和49年度国家試験の改善 医学教育におけるインテグレートドカリキュラム としての基礎医学——人間生物学
医学および看護学カリキュラム計画
基礎医学とその教員の問題点
第8回日本医学教育学会大会抄録
医師の職業的態度
医学校における入学者選抜と改善の方向
医学・看護学教育における新しい教授—学習方法の 開発
医学教育における教育工学
医学教育カリキュラムにおける過剰と欠落
プライマリ・ケアとその教育
医進課程における教養科目の教育
医学部卒前教育において、学生のモチベーションを 高める方法、高まった事例
新入学生に対するオリエンテーション
卒後臨床研修における救急医療の現状と将来へのア プローチ
医学教育における評価
医学校における入学者選抜はどう変わりつつあるか ——改善への歩みと54年度選抜のまとめ
衛生学・公衆衛生学教育
小児医学教育の特殊性
教育管理者の役割
神経科学の卒前教育
死をみとる臨床と医師の人間教育
医学教育の教科書
わが国における認定医・専門医などの制度とその教 育
医学教育における患者面接技法
一般教育課程と専門課程のインテグレーション
医学教育のためのワークショップ

大会の記録は重要である。大会の記録は、12年間ほぼ同じ方式で収録されているので、過去12回の大会のあとを、たどることは容易である。第1～第7回までが各巻第6号が、第8～第13回までは各巻第5号が大会号である。

昭和49年の第1回医学教育者のためのワークショップが、厚生省・文部省の後援で、富士教育研修所で開かれたのを皮切りに、大小の**医学教育のためのワークショップ**が、全国各地で開かれるようになった。

ワークショップは、秀れた教育的効果をもっている。WHOが、主導力をもち、アジア地区では、オーストラリアのシドニーで、health manpower 対象にワークショップを繰り返してきた。

わが国の参加者の帰国後の努力は特筆すべきである。ワークショップにタスクフォースなど指導者として参加することによって、国内の医学教育振興に寄与することが大きい。わが国で開かれた大小の医学教育ワークショップの記録は、本誌12巻6号にあますところなく収録されているので、参照されたい。

会誌は**教育番組**をもつべきであるとの考えのもとに、とくに第11巻より、教育的帯番号がもたれることになった。下記のものが今日までの教育的帯番組である。

保健ケアのための要員

すべての医学生を対象とした統計の上手な教え方

医学教育カリキュラム研究会は、昭和47年より今日まで、綿々と続き、第3巻以降に報告が収録されている。昭和56年までに40回を数えた。小グループの講演会で、外国事情の報告、外人講演などが主体である。

「医学教育」は、たんなる主張の集まりでないとすれば、教育に関する専門用語も当然必要となる。要望に応じて、イラストとともに、主な**教育用語**が、第7巻第4号以来、各号に収録された。テーマのリストを示す。

SOAP

GIO-SBO-LS-R

RUMBA

JARGON

Accountability

Teaching & Learning

Evaluation

Flexibility 柔軟なカリキュラム

Integration 統合カリキュラム

LS-Learning Strategies

Formative Evaluation & Summative Evaluation
Needs

Validity

Cognitive Domain

Affective Domain

Psychomotor Domain

Workshop

Small Group Discussion

Interviewing

Trigger Film

Roll Play

Feed Back

Communication

Lecture

MCQ

Simulation Test

Cheque List & Rating Scale

Essay Type Test

Computer Aided Instruction (CAI)

Over-Head Projector

Response Analyser

Peer Evaluation

ワークショップ・プロダクトとワークショップ効果

医学教育は、つねに何らかの教育機関を舞台に行われる。第10巻から会員機関がそれぞれの活動について報告する欄が常設された。**機関会員のページ**である。このページは、最近の数巻については、委員会の指導のもとに、かなり活用されるようになった。より活発な自主的利用が望まれる。

てがみ欄は、重要である。ご存知のように、各号のはじめに会員の短信が収録されている。内容は、前号の反響が主であるが、傾聴すべき意見が多い。

最後に、重要な**投稿論文**について触れる。編集委員会としては、文字どおり、医学教育に関する調査・研究の投稿を待ちのぞんでいる。最近は、すぐれた内容のものが少なくない。より建設的な、より具体的な、そして、資料に基づいた調査研究は、貴重なものである。それがたとえば外科学に関するものであっても、外科学の雑誌にのせるのと、本誌にのせることの意義の違いについて、諸賢のご注意を喚起したい。

3. 反省と今後

前項に述べたことには、「医学教育」の12年間をふりかえることによって、会員諸兄に対する希望をも含めた

つもりである。本誌を、記録の場として、討論の場として、今後ともより活発に利用していただきたい。わが国の医学教育に関する調査研究は、とくに米国に比べると立ち遅れている。国家的な措置も必要である。しかし、これを待つとともに、われわれがただちにできることも少なくない。幸いに医学教育振興財団の誕生もある。3年目を迎えて、医学教育学会との連関も、より親密さを増してきたようである。この方面の地道な努力を評価し、促進する環境の醸成も肝要であろう。

本誌については、とくに、最近、内容の高度化、専門化とともに、理解困難を訴える向きも少なくない。さきに述べたように、たんなる意見開陳ではない、具体的、学術的内容をもつ論文が増えたとすれば、御同慶のいたりであるともいえよう。すなわち、医学教育が教育学と

して、また、研究として取り上げられてきた証拠であるからである。ちなみに、これに関する本誌編集士の喜びは、かなりの数の会員外購読があることである。

本誌の発展を望む編集委員会としては、しかし、本誌が、たんに、より学問的になり、難解になることを望むものではない。ゆとりと、ユーモアを含む、そして、みなに愛され、期待される雑誌としての発展を望んで止まない。第11巻以来、表紙にも漫画を取り入れたのは、いささかでも内容の難解を和らげる努力の現われでもあった。効果があったであろうか。

筆者は、12年間にわたって「医学教育」編集委員長を勤めさせていただいている。今日まで、変わらぬ励ましと支持を与えられてきたことに対して、厚く、深く感謝の辞を捧げたい。

* * *